堀辰雄の対他意識の変遷について（一）

―『聖家族』を中心に―

山本　裕一

一　はじめに

『聖家族』は昭和五年十月『改造』第十二巻第十一号に発表され、昭和七年二月、江川書房より発行された、堀辰雄の文壇出世作である。この作品は、横光利一の序（注一）に代表されるように心理小説として高い評価を受け、また分析されてきた。また、この作品は、堀辰雄の芥川体験及び宗瑛との恋愛体験をモチーフとして書かれており、実生活との関わりから論じられることも多い。しかし、今回は、そこに描かれた登場人物の他者に対する意識に焦点を絞って論じてみたい。

この作品の主要登場人物は、九鬼、扁理、細木夫人、その娘絹子であり、この四者の相互関係に作品の主眼があることは周知の事実である。そして、その四者の間に左の様な対立図式が成立することは、すでに竹内清己、中島昭氏らの指摘がある。（注二）

（図1）

細木夫人 ―― 絹子
↕　　↕
九鬼 ―― 扁理

図式の一角を占める九鬼が死者である以上、すべての人物についての分析は望むべくも無いが、今回は、扁理と絹子の二人について、この図式を手掛かりに順に論じていく。

なお、分析に入る前に、竹内清己氏の示唆に富む指摘について見ておきたい。氏は、その論考「『聖家族』――方法の制覇――」の中で、この四者の関係性についてくわしく分析し、次の様な指摘をされている。

また細木夫人及び絹子が、九鬼及び扁理にとって〈苦しむもの〉の対象であり、マゾヒズム（その裏返しとしてのサディズム）的感性としてとらえられ〈苦しめるもの〉ともなっているのは、とくに扁理にとって九鬼が〈苦しむもの〉であっても自分を〈苦しめるもの〉ではない

のに比せられ、堀辰雄にとって父性は、同化感性（たとえば堀辰雄にとっての年長者たちにあまねくあてはまる）であって、母性は異化的感性であったことを意味するように思われる。

竹内氏は、『聖家族』のモチーフの一つである〈苦しめあう愛〉の観点から、堀辰雄にとって父性は同化の対象であり、母性及び女性は「永遠に女性的なるもの」「のりこえがたく、君臨しつづける存在」であって、同化しえない存在であるように書かれていると指摘されている。それはこの作品に限定すれば妥当なものである。しかし、視野を堀文学全体に広げた場合、そこに、いささか違った解釈が可能となるように思われる。

この他者との同化・異化という意識は、様々な形で堀辰雄の作品に登場しており、堀文学の一つの特徴を醸し出している。しかも、他の作品では、同化は性別に制限されるものではない。たとえば、これに先立つ作品である「不器用な天使」には、早くから中村真一郎氏によって指摘されてきた次のような描写（注三）がある。

僕の槙を見る視線には、どうしても彼女の視線がまじって来るのだった。僕は彼の顔にうつとり見入りながら、それを強く妬まずには居られない。

主人公は、無意識のうちに彼がつきあっている女性の眼を通して友人を見ている。そしてそれをこばめない。このような感覚は、中村氏の言うように堀の「生来の繊細で鋭敏な気質」が実際の交友関係・恋愛の中から感得したものであろう。ここには先に述べた他者への同化の志向が、その視線によって示されている。そして、それは異性に対してのものなのである。また、この作品には、他にも主人公の友人槙の心情が主人公に伝染したり浸透したりするという描写もある。

その槙の苦痛が僕の中に少しづつ浸透する。そしてその中で、僕と彼と彼女のそれぞれの苦痛が一しよに混り合ふ。

ここでは、同化はすでに一対一ですらなく、三人の間での感情の共有が志向されている。このように、堀には性別にかかわらず、自分が好んでいる他者との同調や精神の共有を志向する傾向が見られるのである。

次に挙げる『風立ちぬ』（昭和十三年四月、野田書房刊）の例なども同化を求める心情の一つの典型であろう。

（前略）私は彼女と心臓の鼓動をさへ共にした。ときどき軽い呼吸困難が彼女を襲ふらしかつた。そんな時、手をすこし痙攣させながら咽のところまで持つて行つてそれを抑へるやうな手つきをする。（中略）そんな晩など、自分もいつまでも寝つかれずにゐるやうなことがあると、私はそれが癖にでもなつたやうに、自分でも知らずに、手を咽に近づけながらそれを抑へるやうな手つきを真似たりしてゐる。そしてそれに気がついたあとで、それからやつと私は本当の呼吸困難を感じたりする。が、それは私にはむしろ快いものでさへあつた。

これに先立つ部分でも、主人公は、彼女の呼吸の変化を「苦しいほどはつきりと」感じている。そして、その苦しさと弛緩とを彼女と共有するのである。そればかりではない。そのような経験があった夜には「自分でも知らずに」それを追体験しようとしている。そして、それは主人公にとって「癖になつたやうに」自然なものであると認識されている。同化の志向の強さとその必要性は、ここに明らかであろう。一連の経験は、主人公の心身を苦しめるはずのものである。にもかかわらず、それらは主人公に「快いもの」すら感じさせている。つまり、心身の苦しさより、婚約者に同化することの喜びのほうがまさっているのである。それが本当の呼吸困難に先立つものであり、無意識の行為である点からも、その同化への志向がどれだけ深いものかわかろう。

以上、二作品合計二例のみを挙げたが、これらの志向は他の重要な作品にも数例が見られる。いくつもの作品にまたがって、この様な現象が見られるとすれば、他者への同化は、同性、異性を問わず見られる堀文学の特徴と言っていいだろう。そして、その分析は堀文学の本質を論じる上で一つの鍵である。

もちろん、右の2例や『聖家族』に見られる同化の志向を、すべて同種のものとして扱うことは一考を要する。結論から先に言えば、他者への同化への志向とは言っても、その間には微妙な変化がある。それは視線と行為といった形式面の違いではない。『風立ちぬ』にも視線の同化は描かれているし、別な形式で示されることもある。そうではなく、その内容面に変化が生じているのである。『聖家族』以前のものは「無意識」の同化であり、それが錯覚であることに本人が気づこうとせず、むしろそこに耽溺している。『風立ちぬ』のものはやはり「無意識」の同化ではあるが、「そんな晩」に決まって起こるという意識に明らかなように、それが同化への志向にすぎないことに本人が気づいている。そして『菜穂子』以降では、同化の志向より、むしろ異化的存在としての他者の認識が多くなっていく。（このような現象が何を意味するのか、また何故起きるのか、については検討を要するが、それは稿を改めて論じたい。）今回は、①竹内論文に言う同化と異化の意識が、堀作品の特徴と言えること、②その理解が堀文学の理解に際して重要なものである事に注意を喚起しておくことにとどめ、その第一歩として『聖家族』を論じてみたい。

この作品については九鬼（芥川）の死から生への回復、扁理（堀）と絹子（宗瑛）の間の愛がよく問題にされる。しかし、いずれも情報が少なく、特に作品単独で読んで行く場合、それらが主訴とは考えにくい（堀の宗瑛の愛に対する期待は大いに感じ取れるのではあるが）。私は、登場人物に見られる他者への同化意識を頭においてこの作品を読んでいく時、他者への同化の志向から、自らを失い、幻影の中に生きている男女の、自我を回復して行く姿を描いた作品として読めるのではないかと考えるのである。以下、それについて述べて

行く。

二　扁理について

扁理は、九鬼の名刺を裏返しにして自分の名を書くエピソードから、細木夫人に「まるで九鬼を裏がへしにしたやうな青年」だと認識される。この事は次節において作家の立場から繰り返し述べられており、九鬼と対照的な扁理の生活態度についても細かく対比的に述べられている。これらの叙述を考えあわせれば、堀があえて扁理と九鬼を「対照的な態度・容貌でありながら精神的類似を持つもの」として読者に認識させようとしていると考えてよかろう。なぜこのようなことが必要だったのであろうか。

扁理が初めて細木家を訪問した時の様子と心理は次の様に語られている。

ときどき彼が船暈を感じてゐる人のやうな眼ざしを夫人の上に投げるのに注意するがいい。／だが扁理の心理をそんなに不安にさせてゐるのは、さういふ環境のためばかりではなしに、細木夫人とともに故人の思ひ出を語りながら、たえず相手の気持ちについて行かうとして、出来るだけ自分の年齢の上に背伸びをしてゐるためでもあつたのだ。／――この人もまた九鬼を愛してゐたのにちがひない、九鬼がこの人を愛してゐたやうに。と扁理は考へた。しかしこの人の硬い心は彼の弱い心を傷つけずにそれに触れることが出来なかつたのだ。（後略）

扁理は「相手の気持ちについて行かうとして」年齢不相当の背伸びをしていると作者は語る。そしてそのついていこうとしている相手の気持ちは、九鬼の蔵書整理の間に見つけた「どちらが相手をより多く苦しますことが出来るか、私たちは試して見ませう」という手紙の内容に呼応する内容である。つまり九鬼と細木夫人の間に生じた恋愛を扁理は見ようとしているのだ。彼は手紙の文句を「しばらく」「口癖のやうに繰り返し」ている。この辺りにも、その世界への憧憬の度合いの強さは想像できよう。更に、初対面の絹子が気に入らなく思えたのは母に似ていないという点であったことを考えれば、彼に背伸びをさせているのは、九鬼と細木夫人の作り出す世界、恋愛への憧憬であると言えよう。彼は、九鬼の恋愛の対象であった細木夫人との出会いのために、九鬼を強く意識するようになり、九鬼の恋愛体験を追体験しようとしている。先に指摘した精神的類似の強調は、このように扁理が自らを憧れの九鬼の位置に置こうとしていることを自然なものとして感じさせる点において役立っているのである。

また、この直前の節には「子供のやうな微笑」と「何も彼も知つてゐるんだと言つた風な」「老人のやうな微笑」を使い分ける扁理が描かれ、その区別は「他人に向つてするのと自分に向つてする」区別であると語られている。扁理は、九鬼の死から「気弱さを出来るだけ表面に持ち出そう」と努力していたのであり、次節では彼が「無邪気な微笑」を浮かべ「子供らしい率直さ」を見せる描写もあるので、この場合、

「老人のやうな」微笑が「自分に向かってする」微笑なのであろう。しかし「何も彼も知ってゐるんだ」といった虚勢は、むしろ気弱さを「独特な皮肉で」隠していた九鬼にこそふさわしい。にもかかわらず、そのような微笑を扁理が見せる、しかも他人に向けるのでなく、自分自身に向けるとすれば、そこに無意識の内に九鬼に同化しつつある扁理の姿を見てよかろう。努力しても彼は九鬼の思念から離れることが出来ずにいるのである。それが扁理自身の持つ複雑さでないことは、直後の「彼は自分の心が複雑なのだと信じてゐた」という表現から明らかであるから、そのように考えるのが妥当だと思われる。

ここまでをまとめてみると物語序盤での扁理は、九鬼との精神的類似を持ち、九鬼との同化の欲求を強く持つ存在として描かれていると言えよう。

絹子との交渉を重ねるにつれて扁理には「さういう愛の最初の徴候」が現れたとされる。堀はそれを絹子に現れたものと同種のものとして推測させているが、実際には何も書かれていない。また、愛が芽生える土壌となるべき体験についてもほとんど何も書かれていない。これらのことが、彼の愛が形而上的なものに過ぎなかったことを暗示しているように思われる。

自分の乱雑な生き方のおかげで、扁理はその徴候をば単なる倦怠のそれと間違へながら、それを女たちの硬い性質と自分の弱い性質との差異のせゐにした。そして「ダイアモンドは硝子を傷ける」といふ原理を思ひ出して、自分もまた九鬼のやうに傷つけられないうちに、彼女たちから早く遠ざかってしまった方がいいと考へた。

（後略）

扁理は、右の様な考えで細木夫人と絹子のもとから離れていく。これは作者自身が述べているように「驚くほど簡単な考へ方」であろうし、「何の考へもなしに」行動したという批判に該当しよう。実際に「傷つけられ」たわけではない。扁理が逃げ出したのは、ここに書かれている通り、自分自身の作り出した「原理」からであり、九鬼の破滅の幻影からである。「女たち」という言葉からもそれは明らかであろう。前出の手紙の文面や扁理の感懐では傷つける対象はあくまで恋愛対象に限られていた。しかし、ここでは扁理の恋愛対象たる絹子だけではなく、細木夫人をも含み込んだ表現となっている。いわば扁理は九鬼に同化し、その恋愛対象であった細木夫人をも恋愛対象であったかのように誤解しているのである。

この後、扁理は踊り子とつきあうようになる。そして、ある時、踊り子を待つ間にもし自分の今待っているのが絹子だったらと空想する。これを堀は「乱雑な生活の中に埋もれながら、なほ絶えず成長しつつあつた一つの純潔な愛」が扁理自身も気づかない内にひょっくり顔を出したのだと述べる。また、細木家に暇乞いをして旅に出た扁理は、その途上で「ラ

ファエロの描いた天使のやうに聖らかな」絹子の神秘的な顔を次第に大きく感じるようになり、「おれのほんとうに愛してゐるのはこの人かしら?」と考える。そしてここでも堀は踊り子との事が「何の考へもなしに自分のほんたうに愛してゐるものから遠ざかるために別の女と生きようとし」た行為と述べる。この二つの挿話で堀が強調しているのは、扁理の絹子に対する真実の愛の存在である。扁理の愛は「成長しつゝあつた」存在であり、その愛がどの程度のものであったのかは、情報の少ない本文からは判断できない。が、少なくともここには扁理が九鬼らの愛の幻影から自由になる萌芽が見える。

先に述べたように物語半ばまでの扁理を支配しているのは、扁理が九鬼と細木夫人の間に見て取っていた「傷つけあう愛」の幻影である。扁理はそれを憧憬し、自らをその幻影の中の九鬼の位置におかんとした。そして傷つくことを恐れて、そこから逃避した。(その過程において、扁理が細木夫人を愛した九鬼と同化する描写も見えた)。しかし、ここで扁理が絹子を「ラファエロの描いた天使のやうに聖らかな」存在として見ている以上、扁理と絹子との間に「傷つけあう愛」の成立は考えにくい。もしそのような愛を彼が心の中で望んでいるとすれば、それは借り物ではない扁理自身の愛である。その愛の成立は即ち「傷つけあう愛」の幻影の崩壊であろう。

三　絹子について

扁理が「傷つけあう愛」の幻影に支配され、九鬼と同化せんとするような記述があったことは前節で述べた。これは、絹子において、より鮮明な形で行われている。

ところが、九鬼の死によつて自分の母があんまり悲しさうにしてゐるのを、最初はただ思ひがけなく思つてゐたに過ぎなかつたが、いつかその母の女らしい感情が彼女の中にまだ眠つてゐた或る層を目ざめさせた。(中略)／そして彼女はいつしか自分の母の眼を通して扁理を見つめ出した。もつと正確に言ふならば、彼の中に母が見てゐるやうに、裏がへしにした九鬼を。

無意識にではあるが、絹子はその母細木夫人の眼を通して、(裏がへしにした)九鬼を見ている。扁理同様、母に同化し、以前行われた「傷つけあう愛」の幻影を追っているのである。そのために彼女は扁理同様、自らの心の変化に気づかない。それは扁理との同席からくるぎごちなさ、息苦しさやアベックに対するにがさの感情、扁理の訪問を待つ行為という形を取って無意識の内に現れている。これらは見て分かるように「傷つけあう愛」とは別種の淡い恋心から来るものである。「恋」以前の感情と言ってもいい。それゆえ「傷つけあう愛」を見ている絹子には、それが扁理への恋だとわからないのである。扁理の暇乞いの訪問を受けた時、ようやく彼女は「彼女自身のために苦しんでゐる青年の痛々しさだけ」を扁理に見いだしている。そして、彼の出発後、扁理への愛を告白す

るのである。

何故私はああだったのかしら。何故私はあの人の前で意地のわるい顔ばかりしてゐたのかしら。それがきっとあの人を苦しめてゐたのだわ。さうしてこんな風に私たちから遠ざけてしまったのにちがひない（後略）

確かにここには遠ざかっていった扁理の為に苦しむ絹子の姿がある。このような後悔は絹子の表情に変化を生み、彼女は「にがにがしげな表情」「狂暴な顔」「苦痛を帯びた表情」で母親に対するようになる。そのような描写によって堀は絹子の感情の激しい揺れを強調してみせている。しかし、絹子が見せるその激しさは、あくまで意地の悪い顔をして自分たちの前から扁理を遠ざけた事に限定されている。「愛を自白した」とは書かれていても、彼女の感懐には扁理への愛は述べられていない。それを考えれば、これも単に恋心を「傷つけあう愛」にひきつけようとしているとも解せるし、思春期特有の自己陶酔と見えなくもない。

絹子は、母が見て取ったように「誰かを愛してゐる」のであろう。しかし、それは「傷つけあう愛」とは別種の恋である。扁理は傷つく前に逃げ出したのであるし、絹子への思いはいまだ形をなしていない。絹子の思いも、その激しさゆえに誤解されやすいが、愛の萌芽に過ぎない。

このことは細木夫人の次のような感懐から見て取れる。

細木夫人はその瞬間、自分の方を睨んでゐる、一人の見知らぬ少女の、そんなにも恐い眼つきに驚いたやうだった。が、その少女のそんな眼つきは突然、夫人に、彼女がその少女と同じくらゐの年齢であった時分、彼女の愛してゐた人に見せつけずにはゐられなかった自分の恐い眼つきを思ひ出させた。さうして夫人は、その見知らない少女がその頃の自分にひどく肖ていることに、そしてその少女が実は自分の娘であることに、なんだか始めて気づいたかのやうに見えた。

扁理への愛を自覚することで絹子は変貌し、この直前まで細木夫人は絹子を「何んだか自分から遠くに離れてしまったやうに思はれてならない」「見知らない少女のやうに」感じている。絹子は当初母の眼を通して母（と九鬼）の世界を見ていた。しかし、その母が理解できないのであるから、母と娘の同化はもはやそこにはない。しかも細木夫人は娘をここで「始めて」「自分の娘である」と再確認するのである。これは絹子が母（と九鬼）の世界とは全く別個の世界を構築していることの証しであろう。更に言えば、夫人が絹子を自分と似ていると感じたのは、あくまで「その少女と同じくらゐの年齢であった時分」の自分である。九鬼と「傷つけあう愛」の関係にあって苦しんでいた夫人ではない。（次の引用中の「長いこと眠っていた女らしい感情」も、「長いこと眠っていた」という点から九鬼との交渉の中で目覚めたものとは考えにくい。）

つまり人を恋しく思い、激しく希求する気持ち（母も思春期に体験ずみである）が絹子の中に生じ、「傷つけ合う愛」

の幻影が崩れかけているのである。そしてそれは、扁理が絹子の面影に「聖らかな」思いをいだくことで、「傷つけ合う愛」の幻影から抜け出そうとしているのと等質のことなのである。

これにつづく部分で、細木夫人は逆に絹子の世界へと取り込まれていく。母と娘の間に生じた同化は今度は逆に絹子の側に向けて起きるのである。

細木夫人は、しかし次の瞬間、自分のなかに長いこと眠ってゐた女らしい感情が再び目覚め出したやうに感じた。九鬼の死後、彼女の苦しんでゐた様子が、絹子の中にそれまで眠っていた女らしい感情を喚び起こしたのとまったく同じの心理作用が、今度は、その反作用ででもあるかのように起つたのだ。そしてそれは、夫人もまた絹子と同じやうに扁理を愛してゐるかのやうに、彼女に信じさせたくらゐの新鮮さで。―

思春期の性急な感情の吐露は、夫人も過去に経験したものであろう。それゆえに娘の激しさを見て、夫人は昔の自分を「再び」目覚めさせるのである。とすれば、母は経験者として娘の性急さをやさしく包み込むこともできよう。現に扁理の死の予感に動揺する絹子を夫人は落ちつかせているのだ。また、末尾部分において絹子は「苦痛をおびた表情で」母の顔を見上げるが、それは「聖母を見あげてゐる幼児」の眼ざしへと変って行く。この変化は、母の包み込むような愛とそれによって救い上げられる絹子の苦痛を抽象化しているものと思われるが、それは母がそのような愛の経験者であることによって絹子を苦痛から救い上げていくであろうことを暗示しているではなかろうか。そう考えれば抽象的で理解の難しい末尾の象徴的場面も違和感なく受けとめられる。もちろん、この母と娘のやり取り自体が「扁理の感受性のはたてにみえている『幻視』の顕現化」として読み得るという指摘（前出竹内論文）もあり、そう考えれば、この部分は扁理の願望を描いたことになるので今述べたような考えは修正を要しよう。しかし、作品の様々な末尾部分の解釈の一つとしてこのような考えも成り立つのではなかろうか。

いずれにしても、扁理の側では不鮮明な形で描かれていた「傷つけあう愛」の幻影から現実の恋へという変化が、絹子の側では明確な形で示されている（そこに宗瑛との恋に対する堀の期待や片山夫人への期待が多分に感じられるのだが今は述べない）。

四　作品中の同化と人物関係図

二、三節で見てきたような扁理と絹子の変貌を見て行く時、私は静的な図式ではなく、動的な図式としてこの作品の人物関係図を捉らえてみたい欲求に駆られるのである。次の二つの図式を見てほしい。

（図2）

〈同化〉

（絹子）←――（母の悲しみによる刺激）

細木夫人――絹子

→

（傷つけあう愛）恋の萌芽

←

九　鬼――扁理

（扁理）←――（背伸び）

〈同化〉

※幻影の世界←現実の世界

（図3）　〈同化〉

（絹子の刺激）→（細木夫人）

細木夫人――絹子

→

恋の萌芽

←

九　鬼――扁理

（旅）――（扁理）

※幻影の世界→現実の世界

作品のはじめにおいて、扁理と絹子は、それぞれ原因は別であっても、本来の自分を見失って、九鬼と細木夫人の眼を通して世界を見ている。二人に同化し、かつて二人の間になされた「傷つけあう愛」の幻影を見ようとしてそれに縛られているのだ。そして、それゆえに、現実世界での年齢相当の恋に二人とも気づきもしていない（図2）。しかし、時間が経つにつれ、関係式には変化が生じる。扁理は旅によって、絹子は病気によって自己を見つめ直す機会を得た。そしてそれぞれが現実の恋愛対象である相手へ眼を向け出すのである（それが堀の言うように「純潔な愛」にまで成長するかどうかはまた別の問題であろう。

それを図式化すると右のようになる。つまり、図2から図3への変化として、この作品の人物関係を捉らえることができるのではないかと考えるのである。そしてこの図式を見る時、当初、九鬼の死という強力な牽引力のおかげで関係図の上部（「傷つける愛」の幻影の世界）に偏っていた三者が、最後の場面では、関係図の下部（恋の萌芽が見られる現実の世界）へとすべて移行していることが分かる。最初に述べたように、この作品の主眼は四者の相互関係である。死者である九鬼を除いた三者にこうしたはっきりした変化が見られるとすれば、この変化（幻影への憧憬からの自我の回復）をこの作品の主題と考えていいのではなかろうか。そして、それは扁理のモデルとなった堀辰雄の、芥川の死のもたらした乱雑な生からの回復の希望でもあったのだと理解されるのである。

他者への同化（幻影への憧憬）の欲求、それに伴う自我の崩壊、そしてそこからの現実復帰がこの作品では見事な展開を見せている。しかし、それはこの作品に限ったものではなく他の作品にも見られるものである。したがって、このような視点で、幾つかの作品を比較し、そのことで、堀文学の新たな解釈を模索していきたい。

注一　横光利一「『聖家族』序」（昭和七年二月、江川書房刊『聖家族』所収）
「内部が外部と同様に恰も肉眼で見得られる対象であるかの如く明瞭にわたくし達に現実の内部を示してくれた最初の新しい作品の一つ」と評した。
これ以外にもこの作品の古典的完成度の高さについては数多くの論評がある。

注二　「『聖家族』――方法の制覇――」『近代の文学15　堀辰雄の文学』（昭和五九年三月、桜楓社刊）所収
「『聖家族』覚書――その作品構造――」『解釈　昭和五六年十一月号、五七年五月号　ただし、『堀辰雄覚書――『風立ちぬ』まで――』（昭和五十九年一月、近代文芸社）による
なお、図式は、竹内氏の提示されている図式を簡略化したものである。

注三　中村真一郎「堀辰雄――その前期の可能性について」第6節（『国文学』昭和五二年六月号）ただし、堀辰雄全集別巻2（昭和五五年十月、筑摩書房）による
氏は、ここに挙げた他に「友人に気に入られるために、友人に感情移入する」「友人の眼でその娘を見る」主人公の描写（4節）と、友人の顔の表情が伝染する現象（トロピズム）についても述べられている（5節）。
なお、「不器用な天使」は昭和四年二月、『文芸春秋』に発表、昭和五年七月、改造社から刊行されている。